

## 志望校を煽るのは誰か

この時期中学3年生は受験校の最終決定を行うこととなります。通常公立高校の受験校決定は1月の学年末終了後の面談会で行われます。

さすがにこの時期になると受験を意識してこなかった生徒も、具体的な高校名を挙げて決定するわけですから、真剣になります。

さて、この際に本人（保護者）の希望と通知表の成績、実力がうまく合致していればいいのですが、ここにずれがあると面談が長引くこととなります。ここでよく問題になるのは、「塾の先生のアドバイス」というやつです。「塾の先生は、模試の結果からみてA高校も大丈夫と言われた。」とか言って学校の先生の機嫌を損ねるケースも後をたたないのではないかと思います。

一般にこの場合、塾がより高い高校を本人に勧め、中学側の先生を困らせるという図式なのですが、果たして本当にそこに原因があるのでしょうか。

よりよい合格者数実績を上げたいと考える大手塾などは、確かに本人の実力以上の高校と認めていても勧めようとするでしょう。本人や保護者にとっても「可能性がある。」とか「チャレンジすべきです。」という言葉は心地よいものですから、これをもって「塾が高い志望校を煽っている。」という批判が生まれるのでしょうか。

しかし塾側の立場で言えば、誰にでもより高いランクの高校を勧めるわけではありません。ではどのようなときに勧めるのかというと、通知表の内申点に余裕がある場合です。つまりもう1ランク、2ランク高い高校を受けることができるのなら、それを勧めるわけです。

したがってそもそもの通知表が目標校に届いていない塾生に、無茶な受験を勧めることはありません。ところが通知表が絶対評価になってから実力に比して内申点の高い生徒が多くなったように思います。年々学力レベルの低下が著しいこの地区の中学校にもかわらず、通知表だけはあっけにとられるほど良いのです。そのことは学校の先生自身が、3年前、6年前の生徒と比べて一番よくわかっていらっしゃるはずですが、しかし内申で「4」や「5」を実際に付けるのは学校の先生です。そう考えると、より高い志望校へと生徒を煽っているのは、学校の先生なのではないかと思ってしまう。

結局は学校での通知表が本人の実力に対して「適正」なものであれば、何の問題もないはずなのです。